

聖書:ホセア書4章11～19節

説教:わたしの民は

はじめに

ホセアが預言者として召しを受けたとき、北イスラエルは聖書の神を棄ててバアルと呼ばれる神々を拝み、人の心も冷たくなっていた時代でした。そんな北イスラエルに対して神はホセアの口を通して厳しいさばきのことばを語り、バアルではなく聖書の神に立ち戻って救いを受けなさいと語り続けます。ここに書かれている事は、遠い昔の遠い国のことではなく、今の私たちにもあてはまることがたくさんあります。神は何を語っておられるのか。神のみことばに耳を傾けてまいります。

1 真実も誠実さもない

1) 生活は豊かになっても

ホセアの時代、人々は豊かに暮らしていました。熱心に山の頂に上ってはバアルにいけにえを献げ、丘の上で犠牲を供え、無病息災、商売繁盛、家内安全を願っていた。そのおかげで畑はいつも豊作、干しぶどうのお菓子も食べられるし、自分たちを幸せにしてくれる。そのようにしてバアルは素晴らしい神々だと言って人々は拝んだ。

そんなところへホセアがさばきのことばを語りました。どんな反応が返ってくるのでしょうか。「バアルの神々のおかげでみんな幸せに暮らしている。変なことを言って、この平和な社会を乱さないでもらいたい。」おそらくこんな冷たい答えが来るでしょう。これは今も同じです。「キリスト教のようにたったひとりの神しか認めないから戦争が起きるのだ。日本にはいろいろな神々がいて、ちゃんと平和に暮らしている。世界は日本を見習うべきだ。」そんなふうに批判する方がおります。

しかし4章1節にこう書いてあるのを思いだしてください。「イスラエルの子らよ、主のことばを聞け。主はこの地に住む者を訴えられる。この地には真実もなく、誠実さもなく、神を知ることもないからだ。」

日本は物が豊かで治安もよく、他の国に比べても平和だと言われます。ではみな幸せなのでしょう。みんな気づいています。いや、物だけでは足りない。心の豊かさがなければ幸せにはなれない。では、心の豊かさとは何か。今日の聖書のみことばで言えば、真実があるのか、誠実さがあるのか。神はそのことを真っ先に問いかけています。

2) 人の心が冷たくなっていく時代

ところが今どうなっているか。小学生の子どもがいるある親御さんから聞いたことですが、子どもたちの間に「論破ブーム」というのがあるのだそうです。相手から自分とは違う意見を言われたり、ちょっと強い調子で「こうした方がよい」というようなことを言われると、「それってあなたの感想ですよね?」と言い返す。それで相手がどまどついていると、「はい、論破」と言ってそれ以上会話がなり立たない。私はこれを聞いて考え込んでしまいました。意見が違うのなら、対話を重ねることで信頼関係を築き上げていく努力をしなければならぬはずです。でも、「論破」と言ってしまえば、自分の間違いとか弱さを認めなくてすみませう。ひたすらに自分の周りに高い壁を築き、自分だけが正しいと言い張ってお山の大将になっていくだけです。

聖書に、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」というみことばがあります。今日のみことばで言えば、真実とか、誠実さということでしょう。しかし、いまそうではない。嘘をもう一つの真実と言い張り、不都合な真実を隠すために不誠実なことを繰り返しています。

2 その先にあるもの

1) 恥を見る

この先はいったいどうなってしまうのでしょうか。19節にこうあります。「風はその翼で彼らを巻き込む。彼らは自分たちのいけにえのゆえに恥を見る。」風というところを少し補って「からっぽの風」と訳すとわかりやすいでしょう。バアルを一生懸命拝み、自分は正しいと思い込み、自分が幸せになることだけを願い、ほかの人のことなどどうでもよい。そんなふうにして、自分の中にある罪を見ようとしないうちに、その先には空しい結果しかないと言われる。北イスラエルのことで言えば、この国はまもなくアッシリアの手に落ちて国が滅んでいきます。人々は故郷を失い、外国に連れられて行く。何が起きてみてもバアルが救ってくれるに違いないと期待しても、結局何も救ってくれなかった。そうやって人々は恥を見ることになるというのです。

2) 罪の広がり

このような罪の影響は、自分たちのところにだけとどまるのではなく、どこまでも拡がろうとします。そのことを15節で言っています。「イスラエルよ。あなたが淫行をしても、ユダを咎ある者にさせてはならない。ギルガルに行ってはならない。ベテ・アベンに上ってはならない。『主は生きておられる』と誓ってはならない。」ここでイスラエルとは、ホセアが住んでいる北イスラエルのことで、ユダは南王国ユダのこと。ギルガルもベテ・アベンも、いずれも不法と悪を行っている町の代表です。主はホセアの口を通してユダの人々に警告しています。北イスラエルのようになってはいけません。ギルガルにもベテ・アベンにも近づかないように。北イスラエルが犯している罪の影響が南ユダ王国にも及ばないようにと警告するのですが、残念ながらユダ王国も北イスラエルと同じ道をたどることになります。

3 神

1) それでも「わたしの民」と呼ぶ

主は、ホセアの口を通してなんども警告したのにもかかわらず、北イスラエルは悔い改めません。バアルを拝み続けて、その罪の影響は南ユダ王国にも及び、北イスラエルは紀元前722年に、南ユダ王国は紀元前586年に滅んでいきます。そうすると、主がホセアを召して語らせたけれど、それはほとんど意味がなかったということにならないでしょうか。ホセアが姦淫を犯した妻ゴメルを買い取って家に連れ戻し優しく語りかけるようにしたけれど、残念ながら一切無駄であった、そういう結論になりそうです。

しかし、神のなさることに失敗とか無駄とか足りないことがあるはずはありません。私たちの罪がどんなにひどくても、神の救いのご計画は揺るがされることはありません。北イスラエルも南ユダも、どちらも頑なな雌牛のように悔い改めることなく主を捨ててほかの神々を拝んで姦淫の罪を犯し、淫らなふるまいで恥を愛してやまない。そういう生活を続けていきます。主は、そのことをご存じでありながらホセアを預言者として召して、主のことばを語らせました。

いったいどのように語ったか。そのことを象徴的に表す表現が、12節にあります。「わたしの民は木に伺いを立て、棒が彼らに事を告げる。」日本であれば、木で彫られた仏像に向かって伺いを立てたり、ありがたいご神体の前にひれ伏して神社に仕える巫女さんがお告げをする。そんな様子を思い浮かべます。このように、あからさまにほか

の神々を拝でいたら、普通ならなんと呼びかけるでしょう。「わたしの民」と言うのでしょうか。絶対に言わないでしょう。むしろ、「おまえたち」とか「あの人たち」というようにして、距離をとった言い方、もっと冷たい言い方をするはずですよ。ところがどうですか。北イスラエルの人々が、いままさにまるで夫を棄てて他の男のところへ走って姦淫を犯している真っ最中なのに、「わたしの民」と呼びかけるのです。私たちがどんなに神を裏切ってひどいことを繰り返していても、「わたしの民」と呼び続けます。

2) 子羊のように養う

それだけではありません。16節後半。「今、主は彼らを 広いところにいる子羊のように養うだろうか。」日本語訳では、「養うだろうか?」と疑問形になっていて、この後に「いや、養うはずはない」という答えを期待する訳し方になっています。確かに、雌牛のように言うことを聞こうとしないなら、それはできません。しかし原文では、この後に「そう、主は養う」という答えができるような表現にもなっている。これはどういうことか。イスラエルは頑なな雌牛のように罪から離れず、心が頑なでまったく悔い改めようとしません。こんな状態では養うことはできません。普通なら、ここでさじを投げるところです。ところが、主はさじを投げない。こんなひどいことをしているイスラエルであるのにもかかわらず、「わたしの民」と呼び続けます。彼らを、必ずご自分の羊として養うのだと言ってください。

どのようにしてでしょうか。ホセアの時代からおよそ760年後に、神のひとり子であるイエスキリストが来られ、私たちの罪の身代わりとなって十字架でいのちをお捨てになり、三日目によみがえられました。このようにして、私たちの羊飼いとなってくださいることを約束しておられた。ここにもちゃんと十字架があるのです。

バアルを拝んでいた人々には、結局空しい風だけが吹くだけで救いはありませんでした。しかし私たちは違います。主は十字架において救いを耐えてくださり、死にも打ち勝つ永遠のいのちをもって御国へと招いてくださる。私たちはこのような確かな約束をいただいています。